

「キリスト教女子人格教育」の現代的使命

湊 晶子*

Our Mission in Female Character Education on the Basis of Christianity

Akiko MINATO*

Abstract

In the present age when all the people are admitted to enter universities with fewer children continuing to develop, there is a tendency to make light of cultural education as well as character education and to regard utilitarian education as more important. An investigation into the problem of why many female education institutes have been founded since the Meiji Era tells us that female character education based upon Christianity has played a very important part in the growth of female character-building. The question which we must consider here is whether we have made full use of character education on the basis of the idea Dr. Inazo Nitobe had fostered under Christianity since the Meiji Era.

In this article I also took into consideration the problem of how we should develop character education as well as career education in order to realize an inclusive society and local revitalization. Although many universities have made a great focus on a practical branch of learning and certification-oriented education, the highest priority should be given to the bringing up of persons educated on the basis of Christianity so as to get high degree of professionalism.

序

少子化が進み大学全入時代を迎えた今日、大学に期待されるのは教養・人格教育よりすぐに役に立つ資格取得、地域の特性を生かした即戦力になる実務教育であるとの意見が最近比重を増ってきている。果たしてそれだけで良いだろうか。

今年4月に日本私立大学連盟主催の「大学の普遍性と地域に根差す大学の溢れる魅力」と題しての座談会に招かれ、意見交換の場が与えられた。芦澤剛園田学園女子大学教授の司会のもと、榊裕之豊田工業大学学長、棟方信彦松山東雲女子大学学長、清水潔皇学館大学学長、と私

* 広島女学院院長・学長

の4人の学長の討論会であった。2時間半に及ぶ座談会であったが、芦澤先生の最後の纏めは「大学の機能面から見た類型の選択に関する実践的な話し合いになるのかと予想していたが、地域社会のため、基礎的な人格教育、リベラルアーツと言う言葉が中心で、私立大学にとっての拠って立つべき共通基盤は何かと言うことを再認識する機会となった」という内容で結ばれた。当日の内容は大学時報2015年5月号に掲載された⁽¹⁾。

朝日新聞記者高重治香氏は、2015年5月15日の朝日新聞の文化・文芸欄で、「職業訓練校化しつつある現代の大学の在り方に対して、今こそ百年前の元祖教養人新渡戸稲造の言葉に耳を傾ける時ではないか」と論駁している。

広島女学院が2016年に創立130年を迎えるにあたって、創立以来の女子人格教育の理念を堅持しつつ、「広島県唯一のプロテスタント女子大学」として「変えてはならないこと、変えるべきこと」を見極め、いかにして地方活性化への使命を担うことが出来るか真剣に取り組んでいく必要がある。「日本プロテスタント史と女子教育」と言う歴史的観点から次の4点に絞って方向性を見出したい。

- I. 明治初期～大正初期になぜ女子教育機関が多数創立されたか
- II. 「キリスト教女子人格教育の理念」と新渡戸稲造
- III. 「キリスト教女子人格教育理念の具現化
- IV. 「人格教育と女性のキャリア構築」～共生社会と地域活性化の実現をめざして～

I. 明治初期～大正初期になぜ女子教育機関が多数創立されたか

1853年（嘉永6年）にペリーが浦賀に来航し、続いて1859年にはプロテスタント諸教派の宣教師が長崎、横浜に来航することによって、明治政府は、一気に西欧文明と接触し、近代国家建設に向けて、また資本主義体制を整えるべく多くの改革を余儀なくされた。

しかし、家制度だけは存続させたのである。家制度は家父長制を残すものであり、家父長は国家に従属する関係で「公」すなわち国家のもとに「私・個」が埋没してしまう社会通念をつくり上げる制度である。家父長制度のもとにおける妻の存在、女の地位は低いものとなった。1871年（明治4）には壬申戸籍が出され、それに対して森有礼が1875年（明治8）に「妻妾論」を世に出していることから当時の事情を垣間見ることが出来る。一個の女性としての人格が確立されていなかった時代に、多くの宣教師や教育者が来日し、キリスト教女子教育機関を設立したことは日本の女子教育に大きな影響を与えた。明治政府も近代国家と社会を建設するために教育の役割を早くから認識し、1871年（明治4）には文部省官立女学校計画布告を出し、

1874年（明治7）には東京神田に女子師範学校（後のお茶の水女子大学）を開設した。

一方、プロテスタント宣教師の来日と共に私立学校が次々に開設され、1870年（明治3）にはフェリス和英女学校が、1871年（明治4）には共立女学校（横浜共立学園）が、1874年（明治7）には青山女子小学校が、1875年（明治8）には神戸ホーム（神戸女学院）が、1877年（明治10）には立教女学院が設立された。

1874（明治7）に提出された官公、私立の統計によると当時32の中学で男子生徒3,125名に対して、わずか28名が女子生徒であったが、明治12年には2,747名と飛躍的に増加している。これは女子中等教育が実際には私立学校によって大きく推進されていたことを示している。

更に1884年（明治17）には東洋英和が、1885年（明治18）には福岡女学院が、1886年（明治19）には広島女学院、宮城女学院が、1890年（明治23）には女子学院が次々に創立され、女子教育はますます盛んになった。

20世紀になると、キリスト教を基盤としたリベラルアーツ教育機関である私立女子大学が次々に設立され、女子教育のレベルが急速に向上し、より自立した女性が育成されるようになった。1900年（明治33）には津田梅子により女子英学塾（後の津田塾大学）が、1901年（明治34）には成瀬仁蔵により日本女子大学校（後の日本女子大学）が、1918年（大正7）には新渡戸稲造により東京女子大学が、1922年（大正11）には西南女学院が設立され、日本の女子教育に大きな影響を与えた。

これらのプロテスタント系の女子教育機関は、女性の人格の確立という近代精神に基盤を置き、長い間男性の隷属下に置かれがちであった女性に新たな息吹をあたえた。これらの女子教育機関は、宣教師により設立されたか、津田梅子、河井道のように独身日本女性リーダーにより設立されたか、日本男性リーダーにより設立されすぐに女性リーダーにバトンタッチし、男性リーダーは後方支援に回りその発展を支えた学校かの三種類に分類される。

1886年に創立された広島女学院と、1918年に創立された東京女子大学には特筆すべき特質がある。広島女学院は、1881年にサンフランシスコでO・ギブソン牧師より受洗した砂本貞吉により広島に「女学会」をスタートさせたことに始まり、1888年にはアメリカからナニ・B・ゲーンズ宣教師を招き、砂本貞吉は牧会に専念し、後方から女学院の発展を支援した。東京女子大学も1918年に新渡戸稲造を初代学長に安井てつを学監に招きスタートしたが、新渡戸稲造は国際連盟事務局次長に任ぜられたためジュネーブに赴き後方支援に回りその後の発展に寄与した。女性の自立が困難な時代に、男性が後方から女性を支援し女子教育機関を設立した例は当時としては特筆すべきである。特にこの点については「新渡戸稲造と砂本貞吉～日本キリスト教女子教育を支えた男たち」と題して2014年9月23日学士会館で講演させていただいた⁽²⁾。

Ⅱ. 「キリスト教女子人格教育の理念」と新渡戸稲造

1. キリスト教人格教育と次世代への継承

新渡戸は『西洋の事情と思想』の中で「人格の意義」についてつぎのように述べた。「西洋人はパーソナリティを重んずる。パーソン即ち人格である。日本では人格といふ言葉は極めて新しい。私共が書生の時分には、人格という言葉はなかった。パーソンという字は詳細に調べると、メンという意味とは違って『人たる』という字である。格といっても資格というような意味は毛頭ない」⁽³⁾。

新渡戸の言うパーソンは、当時一般に理解されていた「個の観念の始まりを近代に置く見解」ではなく、西洋紀元の初めから6世紀ぐらいまでの神学的人格論であり、聖書の時代から325年のニカヤ会議、381年のコンスタンチノポリス公会議、451年のカルケドン会議を経て形成された三位一体論に根底を置く人格論であった。すなわち人格は三位一体の神との関係性の中に形成されるという視点である⁽⁴⁾。

キリスト教では three persons in one すなわち父なる神、子なるキリスト、聖霊とそれぞれの三つの persona を持つという概念の上に神学は成り立っている。新渡戸は東洋と西洋の神観念の根本的違いについて、「パーソンと言うものを深く認めればこそ、他人の権利も認めるのである」と述べている。新渡戸は「パーソン・人たる・人格」について、神学論争をするのではなく、創造主との直線的な愛に満ちた関係の中に見出そうしているところに大きな特質がある。さらなる歴史的分析については、坂口ふみの『「個」の誕生』を参照されたい⁽⁵⁾。

新渡戸の概念を纏めると「人はどこか動じないところ、譲れぬという断固とした信念がなければならぬ。人格神との関係性、対話性の中に人格は形成される」となる。これを新渡戸は「縦の関係 Vertical Relation」と呼んだ。この縦関係を結び得て初めて己が確立され、「ぶれない個」が形成されることを強調した。

この人格論が最も如実に示されたのは、一高の校長時代であった。新渡戸が1906年に一高の校長になった時代は日露戦争（1904）後の動揺期で唯物的・破壊的思想に影響された青年が増加した時代であった。当時の一高の風潮は、業績主義の伝統や当時の時代風潮を強く受けていた時代であった。当時の男子の教育では「身を立て名をあげる」立身出世主義が、女子の教育では「良妻賢母」主義が奨励されていた。

新渡戸にとって一高の剛健主義、籠城主義、国家主義の校風をいかに摩擦なく、人格(Personality)、教養(Culture)、社交性(Sociality)の新しい方向に導くかが大きな課題であった。一高生にとってソシアリティは、一高が確立した伝統的精神である籠城主義と相対立する

観念であったため、運動部を中心とする保守派から強い反発を受けることとなった。この当時のことに就いてはこの場を共にしていた馬場宏明氏の『大志の系譜——高と札幌農学校』⁽⁶⁾に詳しく記されている。しかし1913年4月に一高を辞める時には一高生徒達が新渡戸校長の復職運動を起こすまでに信頼関係が築かれていたことから、新渡戸の人格論が生徒達の中に深く浸透していたことがうかがえる。生徒達の心の奥深くに「存在することの意義」「ソシアリティの大切さ」が刻まれた。

1913年5月1日の夜、全寮晩餐会が開かれ、最後の演説で、「日本人に最も欠けているのは Personality (人格) の観念ではなからうか。Personality (人格) のないところには Responsibility (責任) は生じない」と述べた。このことは現代への貴重なメッセージでもある。

明治以降急速に創立されたキリスト教主義教育機関の建学の精神には、ほとんどの学校で「人格教育」を挙げているが、これこそが学問の究極的な目的である。新渡戸は大学の使命について、1933年刊の『内観外望』『大学教育の使命』の項において教育の第一の目的を「人の心をリベラライズ (自由) するといふこと、エマンシペイト (解放) することである」⁽⁷⁾と定義した。また、大学の存在理由について、「自分より偉い人格にグレート・パーソナリティに接するといふことである」⁽⁸⁾と述べた。

1906年の時点で新渡戸は当時の教育の問題点について、「我が教育の欠陥」と題して「今日の教育たるや、吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪いぬ」⁽⁹⁾と主張し、あくまでも教育の目的を人格形成に置いたことは特筆すべきである。

1904年の「性^{ビーイング}と行^{ドゥイング}『人格形成か行為業績か』」において、「人の行為は主として其品性を表象するものなるが故にこれを尊しとす。善人の戯は愚人のいと賢き業よりも予を教ふること多し。“to be”と言ふは、“to do”と言ふよりも遥かに重んずべきものぞ。汝、善なるべし、しからば汝の為すところ皆善なるべし」⁽¹⁰⁾と述べ、人間はただ一人、神と相対して立ち、その神により慰められ、強くされ、魂の平安を得て存在することが出来ると考えた。

新渡戸にとって、「宗教とは神の力が人の心に働きて、其の人に特有の働きをなさしめるものである。」「宗教とは人が神の力を受けて、これを消化し己の性質に同化して、己のものとして、之を他に顕はすことを言うのである」⁽¹¹⁾と説明され、内村鑑三のような厳しい人格神との神学的対話よりも、神の力が人の心に温かく働いて人を生かす力としてとらえられていた。これは新渡戸のクエーカー教徒としての信仰の故であろう。にしても私たちは新渡戸が生涯をかけて築いた「キリスト教に立脚した Personality 人格と Sociality の精神」を、次の世代に継承する責任がある。

明治以来数々の困難を乗り越えて継承されて来たこの学問の目的と教育の使命を守ることが出来るのはキリスト教学校に於いてである。少子化の影響で特に地方のキリスト教学校は定員

割れを起こしている大学が多いが、最大限の努力をして「キリスト教人格論」を次世代に継承する使命を全うしたいと願う。

2. 「キリスト教女子人格教育」を担う女子大学

新渡戸の言う人格論は、男性社会には徐々に受け入れられてきたが、女性の人格論の確立までは未だ時間を要する。新渡戸自身がそこかしこで婦人をして真の位置を獲得せしむに百年間の準備が必要であると述べている通りである。私はその原因の一つに明治政府が近代国家機構や資本主義体制など多くの改革を急速に行った時に、「家制度」だけを存続させたことにあると思う。このため「女性の人格」とか「個人としての存在」が、「家」の中に埋没されてしまったところに日本の女性がなかなか自立できない事情がある。

新渡戸が強調した女性論は、政治的権利の主張と言うよりは、根本的に神の前に「男性も女性も同等の人格」として創造され、「to be」存在しているというキリスト教に立脚した人間観である。この人格論を一人でも多くの人々に普及させたいとの思いから、『実業之日本』のような大衆誌や『婦人画報』、『婦人世界』、『婦人に勧めて』などに当時の識者から批判を浴びながらも書き続けた。

『婦人に勧めて』では、「所謂良妻賢母主義は、人間を一種の型にはめ込むようなものである。日本の女子教育は、女を妻か、母か、娘かいずれかにしてもひとり立ちの人間らしくない男の付属品のごとく見ている。一個の人間として立派に出来上がった婦人（人格）ならば、妻としては良妻、母としては賢母である」。また、「婦人の方でも特に学才の在る人は、せめて独立自営するためになる位の教育を受けておかなければ、万一の不幸に打ち克つことは出来ませぬ。又其の父兄も其の娘に保険料でもかける考えで、進んで高等教育を授けて貰いたい。結婚の衣装に大金を投ずるだけが親としての責任ではなく、衣装以上の頭を持参させるようにしたいものである。」⁽¹²⁾と強調した。

新渡戸が1918年東京女子大学の学長に就任した時の式辞は、新渡戸の人格論の集大成的言葉であるともいえる。「婦人が偉くなると国が衰えるなどというのは意気地のない男の言うことで、男女を織物に例えれば男子は経糸、女子は緯糸である。経糸が弱くても緯糸が弱くても織物は完全とは言われませぬ。」とある。

Ⅲ. キリスト教女子教育理念の具現化

広島女学院は2016年に創立130年を迎える。創立者砂本貞吉は新渡戸より6歳年上で、1856年（安政3）安芸国佐伯郡已斐村345の1（現広島市西区）で生まれ、1881年（明治14）サンフラ

ンシスコで洗礼を受けキリスト者として帰国、1886年「女学会」を開き広島女学院の礎を築いた。新渡戸は1862年（文久2）に盛岡に生まれ、1878年（明治11）札幌で内村鑑三らと共に受洗。遠友夜学校、第一高等学校、東京女子大学など教育の現場で人格教育者として生涯を送った。

二人に共通していることは、封建的色彩の強い地方に生まれ、砂本貞吉は進歩的なアメリカで受洗し、新渡戸は進歩的教育がなされていたクラーク博士が建てた札幌農学校二期生時代に受洗し、共に当時人権が認められて居なかった女性達の人格教育に尽力した。もう一つ共通していることは、砂本貞吉は広島女学院創立3年後の1889年（明治22）にケンタッキー州出身の女性宣教師ナニ・B・ゲーンズを初代校長に迎え、自らは校長を辞し、実践伝道に生涯を捧げつつ広島女学院を生涯支えた。新渡戸稲造も1918年（大正7）東京女子大学創立5年後の1923年（大正12）に創立時から学監を務めた安井てつ女史を第2代学長に迎え、常に後方から惜しみなく女子教育をサポートした。

明治から大正にかけて、すでに述べたごとく多くの女子教育機関が設立されたが、有能な男性教育者が後方援助に回って支え発展した女子教育機関はこの二校であり、女性進出がまだ途上にある現代への大きなメッセージである。

両者がキリスト教女子教育のミッションとして折ある毎に発信した次の三つのメッセージは、今日の私達へのメッセージでもある。まず、「ぶれない個」「自信の持てる個」「自分を治めることのできる個」を育成すること、第二に「男らしく・女らしく」ではなく「男として・女として」真の人格者として共生すること、第三に「平和をつくり出す人」として貢献することである。

この様に本学がキリスト教人格論に立脚した価値観によって、激動の時代を乗り越えて来た証は、現代の本学への貴重なメッセージである。

IV. 「人格教育と女性のキャリア構築」～共生社会と地域活性化の実現をめざして～

広島女学院は、CUM DEO LABORAMUS「我らは神と共に働く者なり」（コリントの信徒への手紙一 3章9節）の標語のもとに、女性の一生涯を生かすキャリア教育を行っている。砂本貞吉、新渡戸稲造の人格論に立脚して、知識や技術だけを身に着けた狭い視野の人材を育てるのではなく、人間とは何か、生きる目的とは何かを追求し、冷静な判断力と決断力を備え、社会の中で責任ある行動を毅然として取り、しかも寛容の精神をもって他者を受容し、日本および世界に貢献できる女性を育てることを目標としている。

1. キャリア概念を明確に

世界的にキャリアという言葉が用いられているが、厳密な定義は定っていない。「生きること」と「働くこと」のかかわりを考えることが、「キャリア」という言葉で世界的に表されていることに於いては一致している。女性の生涯を分析する上でキャリアの定義は重要である。

キャリアという日本語からは「働く」「仕事」「職業」「労働」という言葉が連想される。金銭化される労働だけが職業であり、キャリアか。3人の子育ての大変な時期仕事を減らさざるを得なかった。私だけが男性社会から取り残される思いがして焦りを感じた時、自分なりのキャリア概念が生み出された。それは労働の意味を歴史的に把握できた時である。

私達は、無意識のうちに労働者と言うとホワイト・カラーより低く見がちである。男性も女性も共に多くの時間を働くために費やし、生きるために労働して一生を全うするのに。古代ギリシアでは労働を「奴隷及び下層階級の人達の仕事」と低く位置づけ、中世では修道院において「労働と祈り」を最高であると、「宗教改革時代には神からの召命 (Calling)」と位置づけた。報酬が得られる労働・職業も Calling。報酬が得られない子育ての時期及び定年退職後の名刺の肩書きが無くなってからの労働も Calling。したがって「労働」も「職業」も同じレベルの言葉であることに気がついた。

この様に考えるとキャリアとは単に「職業能力の集積である」という定義には入りきれない概念があることに気づく。私は「職業キャリア」から「ライフキャリア」に転換すべきであると思う。

私のキャリア定義は、「報酬が得られる職業についている時だけがキャリアではない。具体的に金銭化されない労働がある（主婦労働、ボランティア、文化形成活動、定年退職後の労働など）。各個人が全生涯にわたって形成した労働生活全体がキャリアである。」

2. 女性管理職への挑戦への期待

成果主義の導入や育児休業の普及などで、性差に関わらず働ける環境が私の時代よりもはるかに整って来た。しかし、働く女性は増えて来たが、企業内で責任ある地位に就く女性はまだまだわずかである。そんな状況を是正しようと、管理職など社内リーダーになり得る女性の育成に取り組む企業も出始めた。

女性幹部の育成に乗り出す企業の根底にはダイバーシティ（多様性）という経営理念がある。会社の経営理念の中に女性の価値観を織り込んで、会社の経営を充実させたい考えがある。私は、これからの女性のために、是非先鞭を切ってほしいと願っている。なんでも先例のないことに飛び込むことは不安であるが、是非飛び込んでほしい。これまでの私の人生を振り返ってみて、「女性が最初」という事態に突進してきたように思う。キリスト教に立脚した女性人格

教育を受け「ぶれない個」を確立して、是非これからの社会で先鞭をつけてほしい。

2005年5月23日の日本経済新聞は、「もしも上司から管理職になることを勧められたら—」というテーマで東京都男女雇用平等参画状況調査で行ったアンケート結果を公表した。女性で「引き受ける」と答えたのはわずか18.7%、男性は51.1%と格差が大きかった。最も多くの女性があげた理由は「現在の自分の能力では自信がない」だった。それから3年を経た2008年5月のデータでも「知識や経験の不足」が挙げられている。パイオニアには先例はない。先例を勇気をもって作るのである。

「女性は何故出世しないのか。悪いのは男？女？」と言う記事が東洋経済2011年10月号に掲載されたことがある。スタンフォード大学ビジネススクール教授J・フェファアの分析には傾聴すべきポイントが凝縮されている。

J・フェファア氏は、①「人の目を気にしてはダメ」と言う。日本的な「引くのが美德」というのは、人目を気にしている典型である。はじめから知識も経験も十分にある人はいない。②問題から逃げたら何も始まらない。自立して、人を頼らず、孤独とストレスに克つ強さをもたなければ、仕事は出来ない。③「継続は成功の鍵」、「耐えることも大事」。④「成功する人はどこの国でも通用し成功する。」と言う。

1985年には男女雇用機会均等法が、1991年には育児・介護休業法が、1999年には男女共同参画社会基本法が、2005年には改正育児・介護休業法が施行されたのに、女性管理職比率も低く、第一子出産後退職者比率も高い。政府からは「指導層3割計画」、「育休3年計画」などが出され、制度的には私が働いた頃より整備され、さらに改善しようとする努力がみられるのに、50年前に制度が整っていなかった時代と同じような非難で悩んでいる女性たちが在る。

日本の土壌にキリスト教的人格論が根付くにはまだしばらくの時間を要すると思う。だからこそ歴史的に守られて来たキリスト教大学における女子人格論を大切に育てる責任がある。明治の早い時期に建てられた本学でさえ、2016年にやっと130年の歴史を迎えるのであって西欧の歴史からするとまだ日が浅い。

日本が西欧に門戸を開いた時は、西欧ではすでにルネサンスを経て宗教改革によりプロテスタント諸派がそれぞれの歩みを始めて久しく、イギリス革命、アメリカ革命、フランス革命を経て自由と平等が勝ち取られて一世紀も経っていた。アメリカでは1648年ブレントにより女性参政権が初めて要求されてから300年余以上も経っており、イギリスではウルストンクラフトにより女性の権利擁護が、フランスではコンドルセにより女性参政権が要求されてから200年を経っていたのである。

明治政府は近代国家機構や資本主義体制などの多くの改革を急速に行ったが、前述した如く

「家制度」だけは存続させた。このため「女性の人格」とか個人としての存在は、「家」の中に埋没されてしまった。新憲法によって家制度は廃止されたが家意識として現存しているところに問題がある。

筆者が1989年から1990年までハーバード大学より客員研究員の招聘を受け、「日米女性論の比較」と題して講義を依頼された時代、アメリカでは「女性解放論」が、日本では「自立論」が主流であった。日本語の自立を英語に訳そうとして適切な英語がないことに気付いた。Independent, Self-esteem, Identity どれも適切ではないのである。日本の“イエ”社会、日本的意識構造の中で、どのようにして「個」を確立し、自己確立すべきかを問うた講演を行った。この講演では、“Women’s Jiritsu”, “The concept of ie (family)” と言う言葉を用いて論じた。この講演は“Woman’s Jiritsu and Christian Feminism in Japan”と題して The Japan Christian Review⁽¹³⁾に掲載された。

以上の「キリスト教女子人格教育」の歴史的検証を土台として、大学の更なる充実を計りたい。

1. 「キリスト教女子人格教育」を最優先に

キリスト教女子教育機関として「ぶれない個・人格」を確立し、各々の専門性を生かして、国際社会でも地域でも活躍できる人物を育成する。

2. 「専門性を持った教養人」の育成を目指して

矢沢澄子、岡村清子著『女性とライフキャリア』に於いて結論づけられた警告、「今日一般社会での実学的・資格志向を反映して大学においても具体的専門知識の教示が優先される傾向がみられる。しかし、グローバル化する現代社会の各分野においては、全体動向を的確に把握し、柔軟な視点から問題を処理したり、調整したりするトータルな教養的知性の活用と育成が欠かせない。」⁽¹⁴⁾を心に留めたい。広島女学院大学の大切な女子教育の視点は、「専門性を持った教養人」を育成することである。新渡戸が言う教養をしっかりと身に着けた上で、「国際教育」、「生活デザイン」、「管理栄養」、「幼児心理」のそれぞれの専門性が接ぎ木されて、初めて共生社会を牽引し、地域社会に貢献できる人物となり得よう。

3. 「女性の一生涯をサポートする女子大学」として

女子大学の共学化が急速に進んでいる現状ではあるが、日本の教育史を分析する時に女子大学の果たすべき役割はまだまだ大きい。女性が主役である女子大学において培われた良い意味

の「自信とリーダーシップ」は、女性の一生涯をサポートする土台となる。

女性のライフサイクルに合わせて、人生のどの時点からでも大学に帰って来てエンパワー出来るプログラムをスタートさせる。2016年春から女性のエンパワーメント支援プログラムを促進させる予定である。「広島県で唯一のプロテスタント女子人格教育機関」としての使命を果たすために、さらなる検証を行いたい。

註

- (1) 『大学時報』No. 362 2015年 5月号 「大学の普遍性と地域に根差す大学の溢れる魅力」 pp. 16～31。
- (2) 湊 晶子 『新渡戸稲造・南原賞シンポジウム記録集』「新渡戸稲造と砂本貞吉—日本のキリスト教女子教育を支えた男たち」(竹中編集企画室, 2015年) 33～50頁。
- (3) 新渡戸稲造 『西洋の事情と思想』(実業之日本社, 1934年), 『新渡戸稲造全集』第6巻(教文館, 1969年) 563頁。
- (4) 湊 晶子 「新渡戸稲造における私と公と公共」『公共哲学16 宗教から考える公共性』稲垣久和, 金泰昌編(東京大学出版会, 2006年) 181～208頁。
- (5) 坂口ふみ 『「個」の誕生—キリスト教教理をつくった人々』(岩波書店, 1996年)。
- (6) 馬場宏明 『大志の系譜—高と札幌農学校—』(北泉社, 1998年) 314～315頁。
- (7) 新渡戸稲造 『内観外望』(実業之日本社, 1933年), 『新渡戸稲造全集』第6巻(教文館, 1969年) 407～409頁。
- (8) 新渡戸稲造 「大学教育と職業教育」前掲書 439頁。
- (9) 新渡戸稲造 「我が教育の欠陥」『随想録』(丁未出版社, 1907年), 『新渡戸稲造全集』第5巻(教文館, 1970年) 115頁。
- (10) 新渡戸稲造 「性と行『^{ビーイング}人格形成か^{ドゥイング}行為業績か』」前掲書 22～23頁。
- (11) 新渡戸稲造 「宗教とは何ぞや」『人生雑感』(警醒社書店, 1915年), 『新渡戸稲造全集』第10巻(教文館, 1969年) 19頁。
- (12) 新渡戸稲造 『婦人に勧めて』(東京社, 大正6年) 『新渡戸稲造全集』第11巻(教文館, 1969年) 46頁。
- (13) Akiko MINATO “Woman’s Jiritsu and Christian Feminism in Japan,” *The Japan Christian Review*, vol. 59, 1993, pp. 7～17.
- (14) 矢澤澄子, 岡村清子 『女性とライフキャリア』(勁草書房, 2009年) 230頁。